

語りつがれる暖かい人柄

橋本龍太郎

「大平のおじさん」と私は呼び、なついていた。目のちいぢやな色の黒い、時々大声で笑う時、大きな前歯が子供心に妙に印象深かった。亡父龍伍の友人としての、若き日の大平総理の想い出である。故愛知探一先生を餓鬼大将に集まつていた若き大蔵官僚のなかに大平総理も私の父もまじっていた。時折、わが家が集会場所になる。そんな時、私はふすま越しに「坊やおいで。おじさんとならぼう」と呼んでくれる。「大平のおじさん」の声を心待ちしていた。石原周夫さんやエンベ工こと佐藤一郎さん、皆若かった。昭和二十年春、兵庫県の日本海側に疎開する母と私を、出張のついでに京都まで送つて下さったのも「エンベ工さん」と「大平のおじさん」だった。白鞘の日本刀をぶらさげた「大平のおじさん」が弁当がわりのふかし芋を半分わけてくれた。

それ以来随分長い間、お会いすることもなくて過ぎた。そして父の没後、私が衆議院選挙に立候補して当選させていただいた時には、「大平のおじさん」は時の池田内閣を支える大黒柱の一人として、「外務大臣大平正芳」となっておられた。もう「おじさん」とは呼べなかつたし、「坊やおいで」とも呼んでもらえる雰囲気ではなかつた。党内における立場も、グループもまったく異なり、交渉もとだえたまま、再び長い日々が過ぎた。

政治家大平正芳に個人的触れ合いの機会が生まれたのは福田総裁のもとで幹事長に就任され、野党の予算修正要求の扱いに苦労しておられた頃からである。重厚で慎重な自民党幹事長の内側には昔とちつとも変わらない、のそつとした、しかし暖かみのある「大平のおじさん」がいた。私は嬉しかった。火災のため古い写真を皆失わ

れたと聞き、隅田川でボートを漕いでおられる写真を見つけ、パネルにしてあげたのもその頃のこと。そのパネルのなかには亡父も、愛知先生も、佐藤一郎さんも、石原さんも、もちろん大平総理も皆楽しそうに写っている。

昭和五十三年十二月誕生した第一次大平内閣で、私は厚生大臣の大役を与えられた。総理と閣僚という立場で接する場合、当然、今までのような気楽な関係ではいられない。しかし私は、第一次大平内閣は本当に各閣僚がのびのびと仕事に取り組むことのできた内閣だったと思う。少なくとも明るく楽しい雰囲気の中で私は仕事をさせていただいた。五十四年十月八日以降のことは思い出したくもない。この日以降第二次大平内閣の発足までの間、私は日ごとに苦悩の色深まる大平総理をハラハラしながら見守るばかりだった。

厚生省の職員は大平総理にいいしれぬ親しみを今日も抱いている。厚生省援護局のなかに豊安室がもうけられていることを知る人は少ない。いわんや訪れる人は滅多にない。ここには第二次大戦中の各戦域から集められた戦没者のご遺骨が、千鳥ヶ淵の戦没者墓苑に納められるまでの間、安置されている。無論援護局の職員が香華をたやさずおまもりしているが、誰もおまもりして下さる方がないことは関係者にとって淋しいことであるのも間違いない。ある日、大平総理に私はこの話をした。瞬間、「よし、僕がまいろう」。これには私の方が驚いたが、日ならずしてこの話は実現し、大平総理は本当に厚生省を訪ね、豊安室のご遺骨に花を捧げ手を合わせて下さった。半信半疑だった厚生省の職員達も、現実に大平総理の姿を見、本当に喜んだ。帰途につかれる総理の背に、自然に湧いた職員の大きな拍手が贈られたが、このぬくもりと職員一同の感激は厚生省に豊安室が残るかぎり語りつがれ伝えられて行くだろう。

大平総理、貴方は本当に暖かい方でした。本当にご逝去が残念でたまりません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(衆議院議員・第一次大平内閣厚生大臣)